

いちご栽培の最新情報を学ぶ ～県いちご栽培技術研究会を開催～

神奈川県いちご組合連合会（事務局：J A全農かながわ）は、8月26日、「県いちご栽培技術研究会」を厚木市文化会館（厚木市恩名）で開いた。イチゴ栽培技術や生産資材などの最先端情報を共有し、県産いちごの生産技術向上と安定供給を図ろうというもので、会員農家や県関係者ら約61名が参加した。

会場では、太陽光を吸収し暑熱に効果がある被覆資材や天敵農薬など、イチゴ栽培向けの最新資材が多数紹介された。

講演では、三重県農業研究所農産園芸研究課長の森利樹氏が、イチゴ種子繁殖系品種『よつぼし』と品種開発動向について紹介した。『よつぼし』は、三重県、香川県、千葉県、独立行政法人農業・食品産業総合研究機構九州沖縄農業技術センターが、共同育種により開発した早生、四季成り性のF1品種で、現在品種登録出願中だ。イチゴ生産は、親株からランナーを伸ばして子株を育苗繁殖する方法が主流。親株の病虫害被害が子株にうつると、ハウス全体に蔓延する危険があり、生産現場では病虫害に強い品種の選抜や、病虫害防除対策に力を入れてきた。それに対し、種から育てるイチゴは、消毒済み



いちご連合会農家や県関係者らが集まり、最新の栽培情報を学んだ

種子を蒔くので、病虫害伝染を遮断する効果が高く、増殖効率も良いという。また、親株やランナーの管理作業が不要となり、5月播種からの育苗スタートで良いため、育苗作業の省力化につながり、一度に大量生産する事も簡単になる。開発した産地では、「種子繁殖型イチゴ研究会」を立ち上げ、実用化に向けた基本作型を研究し、28年度以降の種苗販売を目指している。森氏は「今後十年ほどかけて、種子繁殖型のイチゴが増えていくのでは」と予測した。



種子栽培品種「よつぼし」の草姿
(写真提供：三重県農業研究所)

受講者のひとは「育苗を含め、農家に高い栽培技術が求められる従来の栄養繁殖手法を根底から覆すものだ。種子繁殖は、育苗期間の短縮と育苗の省力化につながり、新規参入も容易になると思う。ただ、現時点では種子繁殖品種は『よつぼし』一種類だけ。国内には、産地でブランド化した人気品種が多数存在するので、栄養繁殖から種子繁殖へ一気に切り替わる事はないだろう」と感想を述べた。

県いちご連事務局では、「播種の条件により発芽率に開きがあるなど、まだ研究段階と言えるが、病虫害発生対策の手間やコストの軽減など、省力化のメリットがある。会員農家からの要望に応じて、種子繁殖系品種の試験的な取扱いを検討する予定」としている。